# ヌマンティア戦争とアッピアノス史料〔1〕

楠　田　直　樹

## はじめに

ヌマンティア戦争に関しては，すでにさまざまな角度から論じられてきているが，ここでそのもととなる史料について若干述べておくことが必要かと思う。その中でもよく利用されるのが，アッピアノスの手になるものであろう。その史料価値はさておき，まとまった形であるのは他にないからである。それ以外にはさまざまな叙述の中での断片しか伝わっておらず，考古学的発掘成果をも加味するというのが現状である[1]。ともかくこの二つの史料を中心にして，再構成されてきたわけである。細部にわたっては他の史料にも依拠しながら，このヌマンティアの滅亡という状況を論述してみたい。

さて，その中心史料を記述したアッピアノスについて，ここで多少触れておきたい。彼の概略を見ておこうとして目を通した平凡社刊の『世界歴史事典』に，そして最近発刊された『世界歴史大事典』（教育出版センター刊）にもその項目がないことに気づいたり，わが国ではほとんどその記述について解釈がなされていないことがわかった。それもあり，とりあえずこの稿を始めるに辺り，その部分から筆を起こしておきたい。

我々が彼個人について認知できうることは，まずエジプトのアレクサンドリアの出身であったこと，後95年頃生まれ，後165年頃亡くなったということ，後116年に生じたユダヤの蜂起を経験しており，ローマに移り住み，ローマ市

民権獲得して，弁護人として活動する中で，皇帝の委託事務管理人であったフロントー[2]の影響のもと，アントニヌス・ピウス帝時代に彼の主著である，いわゆる『ローマ戦史』を書き上げていることなどである。

ともかく，彼はトラヤヌス帝治世下の，115年から117年にかけて，アレクサンドリアで生じたヘブライ人の蜂起の時に，愛国心に燃え，かなりの高官にあったが，大きな犠牲を払ったように思われる[3]。そしておそらくその直後に，もっと直接的にいえば，ハドリアヌス帝の治世初期にローマにやってきたらしい[4]。一般的に弁護人と邦訳される causidicus という職業に，ローマ市民権獲得後就いていた[5]。

このローマ滞在中に，彼は，当代でも最も著名な弁護人の一人であったフロントー[6]との友人関係を緊密なものにしていった。そしてフロントーの書簡において，彼が学問研究したアレクサンドリアですでに最初に知り合っていたかのような印象すら与える文節，“vetus consuetudo et studiorum usus prope quotidianus”という二人の間の文言が出てくる[7]。そしてその書簡の内容を見てみると，そのときすでにアッピアノス自身はかなり年老いていることを示唆しており，おおよそ彼の誕生年代も類推可能になってくる[8]。

このようにその生涯すらもほとんど明らかでない作家であるがゆえに，想像以上の困難さを伴なってくるのは仕方のないところである。しかしさまざまな史料がその価値を再点検される中で，このアッピアノス史料も現在その中にあることは事実であろう。アッピアノスの内乱期の記述についてはすでに手がつけられているが，それ以前の記述についてはまだこれからという段階であろう。そうした状況を鑑みながら，特にヌマンティア戦争に関するまとまった記述をもとにして，少しく述べてみたい。

## 1．アッビアノスの作品概要について

とりあえず，ここでアッビアノス作品の全体感を把握することに努めてみたい。

全体を通して，“Ρωμαικήˮ（「ローマ戦史」）と呼ばれ，次のような構成をも

っていたと考えられる。つまり，

I. Βασιλική（「王政戦史」）

II. Ἰταλική（「イタリア半島戦史」）

III. Σαυνιτική（「サムニテス戦史」）

IV. Κελτική（「ケルス戦史」）

V. Σικελικὴ καὶ νησιωτική（「シケーリア並びに島嶼戦史」）

VI. Ἰβηρική（「イベリア半島戦史」）

VII. Ἀννιβαϊκή（「ハンニバル戦史」）

VIII. Καρχηδονιακὴ καὶ Νομαδική（「カルタゴ並びにヌミディア戦史」）
あるいはΛιβυκή（「リビア戦史」）

IX. Μακεδονικὴ καὶ Ἰλλυρική（「マケドニア並びにイリュリア戦史」）

X. Ἑλληνικὴ καὶ Ἀσιανή（「ギリシア並びに小アジア戦史」）

XI. Συριακὴ καὶ Παρθική（「シリア並びにパルティア戦史」）

XII. Μιθριδάτειος（「ミトリダテス戦史」）

XIII. Ἐμφυλίων A（「内乱史」第一巻）

：　　：

XVII.　　E（同　第五巻）

XVIII. Αἰγυπτιατῶν A（「エジプト征服史」　第一巻）

：　　：

XXI.　　Δ（同　第四巻）

XXII. Ἑκατονταετία（「百年史」）

XXIII. Δακική（「ダキア遠征史」）

XXIV. Ἀράβιος（「アラビア遠征史」）

というふうになる[9]。その中で，現在我々の手元に残存しているのは，Praefatio，そして VI 巻，VII 巻，VIII 巻の前半部分，IX 巻の後半部分，XI 巻の前半部分，XII 巻，そして XIII 巻から XVII 巻までの五巻である。

またいわゆる excerpta は失われてしまっており，その再構成は不可能であるが，一部断片に関してはスイダスとか事典類の中に一定数収められている。

次に，このアッピアノスの作品の一般的特徴について述べておきたい。その一巻一巻の題名を見ていくと，そこには民族誌的な視点によって構成されてきたことが一目瞭然であろう。この構成立てをみる限りにおいては，アッピアノス自身がいみじくも述べているエフォロスの歴史作品に沿って叙述した[10]という可能性はなくなってくるのではないだろうか。そして気持ちの上ではカルタゴからイベリアへ，イベリアからシケーリア，あるいはマケドニアへ，というふうに歴史的な出来事を一つの歴史舞台の中に限定する[11]という窮屈そうな設定になっていることからも明瞭であろう。また一方で，アッピアノスの作品とは類似性のないことを言い張っているハリカルナッソスのディオニュシオスの作品に表されている規律に従っている[12]，つまりトゥーキュディデースのいわゆる「季節」的な分割であり，またヘロドトスの主題の出し方を賞賛していたりというふうにそれまでに存在していたさまざまな作品から構成上のヒントを得ていたと考える[13]方が無難であろう。

だから，アッピアノス自身はそれぞれの個別の属州あるいは地方に関する資料を蒐集配置することを考えている[14]。その中で考えうるかぎり，彼と同時代のローマ人から得た情報をもとにして，正確を期し，可能な限り完璧を期すべく展開したというのが本当のところであろう。彼の興味の対象は征服された都市というよりもむしろ征服された属州そのものにあり，それに原則的に集中し，例えばその属州の起源であるとかいったことに包括的態度を取りつつ，興味を示し，とくに最終的には祖国エジプトの歴史，また東方世界のそれを主張するという態度を確認しているように思われる[15]。当然のことながら，取り扱う主題が応用的なものでなくなったときには，民族誌的視点というのは減退してしまっている。例えば，第一巻においては，王の業績を取り扱い，第七巻では，ハンニバルのイタリア遠征を取り扱うように，そうした操作が第十三巻から第十七巻にかけての，いわゆる「内乱史」の中にも出て来ている[16]。しかしながら，こうした場合においても，アッビアノスは自らが保持していた興味の的，つまり戦闘行為，平和な出来事とか地方的差異といったことから逃れるのではなく，自らの叙述手法の中にまとめるという願望を捨て去っていない。ただ，

合理性といった面からみれば，第二十二巻にあたる「百年史」は，その表現が民族誌的立場で秩序づけられており，種々雑多な寄せ集め的な巻になっているように推測される。こうした手法が用いられているのは，例えば「内乱史」の中にも見られるように十分に明らかであろう[17]。

ともかく，このような実用的地理的手法で歴史的出来事を体系づけるという方法は不如意な望みの中から，明らかにそれぞれの巻について年代的な枠組みにではなく，特別な場合を除いて，単一の出来事それぞれの年代を示摘する方向に向かっている[18]。アッピアノスの作品には概括的に述べられ，自身もエジプト出身であったことであり，属州の名残りを比較対象するわけではないが，アントニヌス・ピウス帝の帝国，特にローマ帝国の栄光にさも忠誠心を示しているふうである。こうした彼の感情の高揚が「内乱史」の中に身受けられ，それを受けるかのように，「緒言 Praefatio」に含蓄されているのは明らかなところである。すなわち，「緒言」はアントニヌス・ピウス帝の時代を言及しており，ローマ帝国の栄光の記述から紐解されている[19]。そのローマ帝国の巨大さは，過去において地中海周辺部にあったいかなる権力よりも大きなもので，行為を寄せるに足るものであった[20]が，特にこのような権力が『思慮分別と幸運さで δι' εὐβουλίαν καὶ εὐτυχίαν[21]』ここまで到達したところという考察によってその価値を引き出している[22]。つまり，アッピアノスによれば，『幸運 εὐτυχία』は，『善徳 ἀρετή』あるいは『忍耐 φερεπονία』，『苦悩 ταλαιχωρία』を手助けするものであるとは考えてはいない[23]。そしてローマ帝国は大いなる正当性のもとに建設されたということに満足で誠実な認識をもっている。この感覚的概念が，まさに彼が存命していた時代にその幸運を十分に分かち合っていたほどに，アレクサンドリア出身の歴史家アッピアノスに何度となく現われていた。その中で特に重要なことは，もし内乱を制するものに何らかの概念規定をしようとするならば，帝国内外において，公私ともに王政制度の中に生じた平和と繁栄を同一視していたことであろう[24]。アッピアノスにとっては，先行していた王政安定の七十年ほどの歴史が帝政期の準備期間以外の何ものでもなかったというのは誇張でも何でもなかった[25]。だから，彼はその王政期を，

「あらゆる物事が，長い平和と安定を通して，確実な幸運の方向へと歩んでいった[26]」と考えている。さらにローマ帝国はそれ以上は有益でない境界線にまで至っていた[27]，と。内政状況はといえば，すなわち社会的関係であるが，それらはよく定義づけられ，掻き乱されることを阻止できるような体制になるところまで達していた[28]，と。つまりアレクサンドリアにおける反ローマ的動きへの呼応を示していた。アッピアノス自身はこのローマ帝国内外に同時多発的に生じた騒乱に巻き込まれて亡くなったのではなかろうか。

では，このアッピアノスの作品の史料価値は一体どうなのか。残念ながら，彼の帝政概念あるいは出来事については全くのところ純然と表面的な記述があるのみで，如何ともしがたいものがある。「内乱史」についても，さまざまに解釈するのが不可能な一般的記述に終始し，材料の奥深い修正解釈にまで至っていない。事実，アッピアノス作品の分析は今まで一度もピッビアノス作品そのものが史料的に使用価値があるという一般的結論を確認したためしがない。言い換えれば，我々にとってその史料価値というのは，若干の場合その例外も考えられなくはないのだが，重かつ大には違いないが，アッピアノスは歴史家として比較的限界をもっていたことが認められるからに他ならない。すでに民族誌的視点の適用に関しては前述してきたわけであるが，「ローマ戦史」の実用的部分のためにその分析的効用はある面で超越されてしまったところがある。しかし一面アッピアノスは自らの作品叙述使命というのを比較的穏健に固持し，彼以前に叙述されてきた歴史作品の中でそれほど触れられることのなかった属州に関する記述を正当に並列させるという限界すら持ち合わせていた。そして明らかなように，彼は広範で十分な史料を配列できたときには，例えばイベリア半島での戦い，カルタゴとの戦いなどのように，またハンニバルの遠征とか，ミトリダテスの業績などのように，よく洗練された挿話を用いながら，『引用の多い寄せ集め』的特徴が，色濃く出ていたが，それが目を引かなくなるほどであった[29]。しかし非常に細部にわたったり，彼自身が研究していない主題になると，途端にその取扱い状況が変わってくるのも事実である。その顕著な実例が，「イリュリア戦史」である。この場合にはアッピアノス自身の作品叙述

方法に関する有益な示唆を伴なっていることも事実である[30]。

こうしたアッピアノスの叙述に関して，Meyer, Ed. は，「まさしく無知なところが見え隠れする」と示摘し[31]，Rosenberg はアッピアノスに対する判断として，“Appian ist, .....ein reiner Dilettant und überall, wo er sich für einen Augenblick von seinen Quellen losmacht und selbständig zu urteilen sucht, von ruhrender Unwissenheit” と断を下している[32]。確かに基本的な勘違いがかなりあることは事実であるが，それ以上に現存史料の欠如がアッピアノスの立場を守っていることも事実である。こうした彼，ないしは彼の作品に対する一般的概要を念頭におき，以下ヌマンティア戦争に関する叙述の一端を見てみたい。

## 2．ヌマンティア戦争と「イベリア半島戦史」(84.363-98.427)

ここに，アッピアノスの「イベリア半島戦史」の中でヌマンティア戦争に関係する部分を試訳しておきたい[33]。

[84]363.ローマ人にとって期待を裏切り，長期戦となって，憎しみの出てきたヌマンティアとの戦いは，カルタゴを征服したコルネリウス・スキピオ［・アエミリアヌス］を再びコーンスルに選出し，彼がヌマンティアを攻略できる唯一の人物であると信じるようになってきた。364.彼は元老院でコーンスルに任命されるにはまだ年齢的に若すぎた。同じようなことが以前同じスキピオがカルタゴに対する戦いのときに将として選出され，それに対して護民官が年齢制限規定を緩和し，その翌年に再びその規定をもとに戻すという出来事があった。365.ともかくスキピオは再びコーンスルに就任し，ヌマンティアへ急行した。彼は当時戦いが頻発し，そしてイベリア半島には多くの兵士がまだ残っていたので，徴兵募集で軍団を構成することを諦めた。しかし元老院の要請で彼と関係の深かった諸都市や諸王から彼のもとに馳せ参じた一定数の志願兵で構成することができ，その軍団にローマの善隣友好者や彼の友人たち五百名を加え，これを軍団の中におき，善隣友好軍団と呼称した。366.全体としてほぼ四千名となったこの軍団の指揮を甥のブテオに任せ，自らはわずかな兵士を伴な

い一足先にイベリア半島に入り，［イベリア半島残留兵の間で］怠け癖がつき，内輪もめがあり，贅沢三昧になっているのを聞き及び，ひとまず厳格な訓練で兵を鍛えない限り，敵を打ち負かすことなどおぼつかないことを悟った。

［85］367.彼は［軍団駐留地に］到着するや，あらゆる商人，売春婦，予言者，そして卜占者を［そこから］追放した。というのは，兵士たちは彼らによって度重なるように悪い結果を吹き込まれ，敗戦の恐れに硬直していたからである。また今後のことについても，彼は不必要なもの，卜占のための犠牲すらも持ち込むことを禁止した。368.彼はまた自らが残してもよいと言明したものは別にして，［彼らの持ち込んだ］車やその中に摘んであった奇々怪々なものを売り払い，全ての駄獣を捨棄するように命じた。また生活用品については，焼き串，真鍮性やかん，湯呑み茶わんの携帯は許されていたけれども，兵士たちの食事は蒸したり焼いたりした肉切れに限られていた。369.兵士たちがベッドを使用することを禁じ，スキピオも自ら率先して藁のベッドに横になった。そして行軍に際して，騾馬に乗馬することを禁じた。彼は，「というのも，戦いの最中に徒歩行軍すら出来ない兵士たちから何を期待することができようか。」と語っていた。そして兵士たちは誰彼の手助けを受けることなしに風呂に入らなければならないが，騾馬だけは手がないので他の者が洗ってやる必要がある，とスキピオは皮肉たっぷりに言い放った。370.こうして彼は兵士たちを直ちに健全な軍団へと変えていった。そして彼は，兵士たちにとっては近寄りがたく，情実，特に軍規に対する情実を鎮ませることで，尊厳させ，恐れさせていった。371.彼はよく，軍規遵守に厳正厳格な将軍は兵士たちを実践向きにするが，他方安易で気前のよい将軍は敵陣にのみ有用であるにすぎない，と広言して憚らなかった。それに続けて，後者の兵士たちは楽しむが不服従である一方，前者の兵士たちはあらゆる非常事態に憂鬱な態度をとりはするが，従順に即応するからである，と。

［86］372.こうした中で，彼は膨大な軍事訓練を完璧にするまで敵との戦いは辛抱していた。彼は実際隣接するあらゆる平地を詳細に考慮し，毎日新しい野営地を一つまた一つと構築しては崩し，深い壕を掘っては埋め，高い城壁を築

いては壊し，日夜個人的にその行動を客観視していた。373.兵士たちが戦列離脱を実行するのを避けるべく，それまで彼は長円形に行動させており，誰人であろうとその彼の指示した隊列位置を変更させるのを許さなかった。彼は隊列の周囲を動き回り，よく後方部隊を訪れ，騎兵を下馬させたり，病気の兵士に彼の座を与えたりしていた。そして騾馬に積荷が多すぎると，その積荷の一部を兵士たちに運ばせたりしていた。374.彼は野営地構築直後，日中先鋒を形成していた兵士たちに野営地周辺を行軍させた後，散開行動をとるように要求していた。そして騎兵にはその地域一円の一掃を命じていた。一方で，残存部隊は割り当てられた軍事行動を遂行した。つまり，壕を掘るものもあれば，城壁を築くものもあり，テントを張るものもあった。また彼はそうした作業が終了する頃までに，綿密に時間を計算していた。

[87]375.彼は軍団が彼自身に対して機敏で従順であり，厄介な任務に耐えうることができると断を下したときに，やっと野営地をヌマンティアの近くにまで移動した。誰か気のついたものがすることができるように，彼は前進基地に守備隊を配置しなかったし，さらには事実夜襲を被ったりとかローマをすでに侮っている敵の侮辱を被らないように，軍団を分散させていた。376.また敵を攻撃しようともしなかった。というのも，彼はまだ戦略を検討中であり，それが実行できる状況を見守り，ヌマンティア人の計略を見抜こうとしていたからである。その間に野営地後方の全ての土地を開墾耕作させ，まだ青々としていた穀物を収穫させた。377.こうした耕作地から［収穫物が］刈り入れられ，前進する必要性が生じたときに，多くの兵士たちが彼に今ヌマンティア〔の人々〕を平原地域に連れ出し，一気に決着をつけるように進言した。それに対して，彼は次のように言った。一番気にかけていることは戦いが開始され，都市内部から急襲され，撤退することにある，と。378.それに続けて，「我々の軍団はともかく穀物収穫とか今までの蓄積した疲弊から解放され，家畜，荷車，荷重を［ここまで］持ち運んでくることができた。そして戦いは厳しくも結果のわからないものであろう。もし我々が敗北を喫すれば，［ローマの］危機は重大な局面を迎えるし，逆にもし勝利すれば，栄誉にしろ利得にしろそれほど大き

なものとはならないだろう。」と。379.そして愚かなことは小さな成果を得ようとするために危険を冒すことである。だからこそ，彼は何らかの必要性がある以前には無計画な将軍だとみなされていたに違いないし，他方では立派な将軍は必要な場合にのみ危険を冒すものである，と。さらに付言して，医者は患者が最初に試みた薬を飲むまで切開をしたり焼いたりしない，と言った。380.こう語りかけながら，彼は士官たちにできる限り長い道のりをとるように命じた。自らは野営地の反対側への遠征に参加し，そののちウァッカエイの領土にまで前進した。その地からヌマンティア人は食糧などの供給物を買い付けており，その道を完全に切断することで，［自分たちにとって］食糧として利用可能なものを別にして，残りは積み上げて燃やしてしまった。

［88］381.パランティア領内のコンプラニウムと呼ばれている平原で，パランティア人はちょうど丘陵の分水嶺の背後に大軍を隠しており，その一方で他の軍隊はローマの簒奪者たちを公然と悩ませていた。382.［スキピオは，］当時軍団将校で，のちにこの出来事を叙述した歴史家のルティリウス・ルフスに，騎兵四軍団の指揮をとり，攻撃してくる敵を追い返すように命じた。ルティリウス・ルフスは敵が退却するや，機敏に敵を追い，［敵の］逃亡者たちを追って丘陵に突進した。そこで待ち伏せしている部隊を見つけたときには，［スキピオは］彼に自軍を深追いさせたり，攻撃させたりするのではなく，敵に見せつけていた槍騎兵を伴なった防禦を施し，単に敵の攻撃を防ぐように命令していた。383.スキピオはルティリウス・ルフスが命令に反して丘陵を駆け上がっていくのを見つけるや，驚き，急いで彼のあとを追った。スキピオが待ち伏せを見つけたとき，騎兵を二手に分けて，両側から二者択一的に敵を急襲するように命じ，そして一斉に槍を投げ，退却するように命じ，突進してきた同じ場所にではなく，次第次第に両面から退却するように指示した。384.こうして，騎兵は安全に平地に戻ってきた。彼は野営地を移し，再び撤退したので浅瀬でぬかるむ河川を横切らなければならなかった。ここで敵は彼を待ち伏せていた。385.この事実を知った途端，脇道に逃れ，待ち伏せの危険に晒されにくい道を選んだ。この退却中，彼は暑さと渇きのために夜行軍を続行し，わずかな水を

求めて井戸を掘った。彼は大変な困難な状況の中で部下を救出したが，騎馬や駄獣は渇きのために死んでいった。

[89]386.スキピオは，ルクルスが条約を破棄していたカウカエイ人の領地を通過している間に，自軍の地に安全に帰還できることを部下たちに宣言した。387.彼は再度ヌマンティアの領地に入り，越冬した。ここにマシニッサの孫息子ユグルタが十二頭の戦象と射弓部隊，投石部隊を率いてスキピオにアフリカから合流した。388.［スキピオが］絶えず近隣諸村落を劫掠している間に，敵は湿地帯でほぼ四方を囲まれている，とある村落で彼を待ち伏せた。その待ち伏せ部隊が隠れていた峡谷はちょうどその反対側であった。389.スキピオは兵力を二手に分け，一方が村落外に軍旗を残したまま，村落に入り掠奪を行ない，他方大多数を占めていた部隊は騎馬でその周辺を駆け巡っていた。待ち伏せ部隊は後者に襲いかかった。390.その［後者の］軍団は待ち伏せ部隊に戦いを挑んだ。スキピオはたまたま軍旗近くの村落の前に立っており，村落内部で略奪していた兵士たちに召集喇叭をかけた。その一千名の部下たちを集合させる前に戦闘体勢に入っていた騎兵を助けにいった。391.村落中に残っていた兵士たちの大部分が外に打って出たために，彼は敵を駆逐することができた。逃散者を追跡することはせず，自軍野営地に戻り，［見張りのために］若干名をその両側に配置した。

[90]392.その直後に，彼はヌマンティアに近い場所に二つの野営地を構築し，彼が一方［の野営地］を指揮し，もう一方を実兄マクシムスの指揮に委ねた。ヌマンティア人は多勢で打って出て，戦いを挑んできたが，その徴発を無視し，全く絶望的な状況の中で戦っていた兵士たちを戦場に呼び戻すのは懸命な方策ではないと考え，むしろヌマンティア人を閉塞状況に陥れ，飢えを余儀ない状況にさせたかった。393.都市［ヌマンティア］周辺に七つの見張り塔を設置し，彼は攻囲戦を〈開始し〉，そして〈同盟諸部族〉それぞれに書簡を送った。その中で兵力派遣を懇請した。その兵力到着を待って，数部隊に分け，自らの軍団も新たに分割した。そして彼はその各々の部隊に指揮官を配置し，都市周辺部に堀や柵を巡らすように命じた。394.ヌマンティアの外周が24スタディオン

（4㎞余り）あったので，その周囲を巡らす作業は二倍以上の距離になった。この空間が全てそれぞれの部隊に割り当てられていった。395.そして何処からか敵が急襲してきたならば，日中なら長い槍に赤い旗を巻きつけ，夜中なら火を燃やして合図するように，彼は命中していた。それで，彼とマクシムスが必要に応じて援軍に駆けつけることを確認していた。396.この作業が完成をみ，効果的に敵の急襲を撃退したので，この背後にそれほど長くはないが，別の壕を掘り，柵でそれを要塞化し，厚さ2.5ｍほど高さ３ｍほどの胸墻なしの壁を構築した。そして彼はほぼ30ｍごとにこの防禦壁の全周を見渡せるように塔を築いた。397.泥湿地の周りに防壁を築くことができないので，彼はその地を防衛するために，同じ高さで同じ厚さの盛土をその周りに築き上げた。

[91]398.こういうふうに，スキピオは，思うに，戦場での戦いを避けることなく，都市の周辺に防壁を張り巡らせた最初の将軍であった。ドリオス川は要塞線に沿って流れており，ヌマンティア人にとっては供給物資を運搬したり，兵士を前進後退させたりするのに非常に有益であった。川に飛び込んだり，小さな船に身を隠したりするものもあれば，強風が吹きつけると，帆船で突破するもの，あるいは流れの手を借りて櫂をを用いて突破するものもあったりした。スキピオはその川の広さと流れの速さのために橋梁をかけることができなかったので，架橋地点の両側に塔を築いた。その塔にそれぞれ材木をロープに結わえ付けた。その長い材木を流れの中におき，たくさんの剣や鎗先をそれに結わえ付けていた。399.その材木にむかって進んでくる流速によってそれは絶えず動いていた。それで，敵は泳いだり，飛び込んだり，小船で航行したりという方法で密かに通過できなくなってしまった。400.こうしてスキピオは自ら望んでいたことを達成した。むしろこれが，誰にもそうした出来事と関わりがあるとは思っていなかったし，誰にも［その考えの］中に入ってくることはなかった。彼ら［ヌマンティア人］は自分たちの周りで何が進行しているのかの知識すら持ち合わせていなかった。こうして彼らはさまざまな供給物資や備品の欠如にあうことになった。

[92]401.あらゆるものが準備され，石弓，投石器そして他の攻城用具が塔の

上に運ばれ，石，投げ矢や投げ槍が胸墻に集められ，弓術兵，投石手が城砦のそれぞれの場所に配置されて彼は重複するような間隔で，昼夜を問わず何が起こっているのかを伝達させるべく，全城壁の周囲を互いに言葉をかけられるように伝達係を配置した。402.彼は危急時においてはそのそれぞれの塔に最初に攻撃された場合には信号を発すること，そしてその信号を見たときには他の塔も同様にすることを確認しておいた。それは，彼が信号によって動揺している部署に素早く忠告を与えられるように，そして伝達係によって特別な事項を知らせるためのものであった。403.軍団は今では原住民をも加えて六万の兵力になり，その兵力を彼は調整して，半分には城壁守備の任務を与え，必要があれば［援軍を］望まれる場所に移動するようにさせた。［残った兵力のうち］二万は必要なときには城壁の上で戦うことが可能であり，残り［一万の兵力］は予備兵として保持されていた。404.こうした予備兵力も指示された配置場所を維持しており，命令なしに場所を移動することは許されなかった。だから，それぞれの兵士たちに攻撃の合図が与えられれば，指示された場所に直ちに飛んでいくことができた。

405.このようにスキピオによって調整されたもの［戦略］は非常に正確無比なものであった。[93] ヌマンティア人は城壁守備兵に対してあちらこちらと何度となく攻撃を仕掛けてきた。しかし守備兵の行動は敏速で鬼神のようであった。406.あらゆるところで信号が立ち上がり，伝達係があちこちと駆け巡った。そして城壁を防禦していた兵士たちは群がってその場所に飛んでいき，あらゆる見張り塔で軍笛が鳴り響いた。それで50スタディオン（8㎞余り）に及ぶ［城壁の］全周は直ちに最も恐るべき様相を，誰が見たとしても，表わにしていた。スキピオはこの防禦城壁を，日夜を問わず，視察し，巡回していた。

407.彼は敵がこういうふうに攻囲されていることを確信し，彼らが食糧，武器あるいは援助すら得べくもない状況に保たれており，［敵の降伏が］それほど長い先のことではないであろうと感じていた。[94] しかし，ヌマンティア人の中で最も勇敢で，カラウニオスと呼び慣わせていたレートゲネースは最も信頼の厚い五人の友人を誘い，同数の奴隷と馬を引き連れて，両軍が睨み合っ

ている緩衝地帯を曇り空の夜闇に紛れて密かに折り畳んだ梯子段をもって横切った。408.彼と友人たちが防壁に達して，それを飛び越えて，守備兵を殺し，奴隷を後方に送り返し，馬を橋頭堡にまで連れていき，アレウァキ人の町の方に向かって馬を走らせた。彼らは血縁部族としてヌマンティア人を助けるために，オリーブの木の枝をもって［アレウァキ人に］懇願した。409.しかし，アレウァキ人は，ローマ人を恐れる余り，彼らの懇願に耳を傾けようとさえせず，直ちに彼らを追い返してしまった。ルーティアという富裕な町があり，そこはヌマンティアから300スタディオン（50㎞余り）離れていた。その青年たちはヌマンティア人に共感をもって，彼らに援軍を派遣するように町で説いて回った。しかし，長老たちは極秘のうちにこの事実をスキピオに通報してしまった。410.それで，スキピオはこの知らせを受けて八時間ほどで可能な限りの軽装歩兵軍団を率いて直ちに当のルーティアに赴いた。直ぐに昼間の間にルーティアを包囲し，青年指導者たちを彼のもとに引き渡すことを要求した。そしてその町の住民たちが，彼らが町からすでに逃亡したと答えた時，使者を派遣して，もし彼らが投降しないならば，町を却掠破壊することを彼らに告げさせた。411.彼らはこの脅しに恐れをなし，青年指導者たちを［スキピオの］前に突き出した。その数はおよそ四百人であった。スキピオは彼らの手を切り落とし，軍勢を撤収させ，馬で立ち去り，翌日の夜明けには自らの野営地に戻っていた。

［95］412.ヌマンティア人は空腹に悩まされながらも，スキピオのもとに使者五名を送り，もし投降すれば，穏健な取扱いをしてくれるのかどうかを尋ねさせた。彼らの指導者アウァルスは，ヌマンティア人の政治目的とか勇猛果敢さについて多くを語り，そして今でも何も悪事を働いているわけではないが，妻子のため，部族の自由のために，このような現在の悲惨な運命に陥ったことを付言した。413.［アウァルスは，］「それで特に，スキピオよ，汝善行を熟知した人よ，このように勇敢で男らしい部族を助命し，我々にまで悪弊の中での選択として，より人間的な条件，我々が耐えうることができるような条件を包摂できるのは，我々がついに運命の変化を経験している今こそ，汝のみである。今まさに，我々に公正な条件を提示することでわが都市の投降を受諾するか，

また最後の一戦で非業に死にゆくのか［を決めるの］は我々ではなく，汝である。」と語った。414.アウァルスがこのように語ったとき，スキピオは，（彼は捕虜から内情に通じていたのではあるが）彼らが武器を捨て町そのものが降伏しなければならないと簡潔に語った。415.この回答が知らされると，ヌマンティア人は，自らの絶対的自由と他人の命令に服従するという全く矛盾した慣れない出来事のため，しばらくは堪忍しがたく，以前にもまして野蛮になり，その困惑に逆上して，アウァルスと彼についていった五人の使者を殺害してしまった。というのも，彼らがスキピオと私的な交換条件を結んだのではないかとの疑いをもった人々がいたからである。

[96]416.この直後から，食べられるものは全て，穀物にしろ，家畜にしろ，草木にしろ食べられてしまい，人々が食べ物の奪い合いを余儀なくさせられてしまったので，彼らは蒸した皮を嘗め始めた。そしてこれもだめになると，人肉を蒸して食べた。その最初の人肉は自然死を遂げていたものであった。その人肉を調理して細かく切り刻んで食べた。そののちには病人の人肉は嫌われていたので，強者は弱者に手をかけて襲いかかった。417.どのような悲惨なかたちであれ，全ては生き残るために扱われた。彼らは食べ物のために野蛮な出来心に戻り，肉体は飢え，疫病，長髪そして粗略さのために野生本能むきだしになっていった。このような状態になって，彼らは完全にスキピオに投降していった。418.彼はその同じ日［投降した日］に，指定の場所に武器をもってくるように彼らに命じて，その翌日には別の場所に集合するように命じた。しかし，彼らはその日をすっぽかし，そのうちの多くのものがまだ自由に執着し，自らの生命を賭ける方を望んでいると宣告した。そこで，彼らは死の準備をすべく一日だけ猶予を求めた。

[97]419.この小さな蛮族の町ですら，自由や勇敢さを愛する心がこのように存在していた。開戦前には八千の兵士で，彼らはローマ人に何と数多くの悲惨な敗北をもたらしていたことか。彼らはローマ人と対等に条約を締結しようとしていたが，ローマ人はかつていかなる人々ともそのような条約を締結したことはなかった。また，彼らは派遣されてきた将軍にことごとに戦いを挑んで，

六万の兵力をローマに投与させていた。420.しかし，スキピオはそのとき将軍として彼らよりも実戦経験に富んでいたことを誇示していた。彼はその無敵の敵軍が飢えで縮小するときまで，その野獣的な敵軍との交戦を避け続けた。こうしてヌマンティア人を捕虜にすることのみが可能であり，ただその一点で彼らは捕らえられてしまった。

421.彼らの少数精鋭さと忍耐強さを振り返ってみれば，彼らが持続してきた雄々しい行為とその時間的長さは，私にヌマンティア人の歴史の特殊性を語りかけてさえいるようである。とりわけそう願ってきた人々はさまざまな方法をとって自害し果てた。422.そして残った人々は三日目に指定された場所に出かけていき，見るに忍び難い不思議な光景を目の当たりにした。というのも，肉体は朽ち果て異臭を放ち，毛髪や爪は長く伸び切っており，汚れで自身不鮮明極まりのない状態であったからである。そして彼らは堪え難い異臭を放つと共に，着用していた衣服は同じようにむさ苦しく，同じように異臭を放っていた。423.こうしたわけで，彼らは敵の前に哀れな姿を晒したが，同時に彼らの目に末恐ろしい光景が現出した。つまり，激怒，悲痛，倦怠の表現や人肉を食べたという意識が現わになってきた。

[98]424.スキピオは凱旋式挙行のためにそのうちから五十人を選んで残りを売り払い，その町を完全に破壊した。これで，このローマの将軍は二つの有力だった都市を潰滅させた。425.その一つはカルタゴで，元老院の判断によれば，都市として，そして帝国権力として偉大であり，さらには海陸の優位さを合わせ持っていたために，またもう一方はヌマンティアで，それは小さく，人口は散在していたが，彼自らの責任で，ローマ人はいまだにその処遇については無関心であったけれども，これらを潰滅させた。426.彼はヌマンティアをローマ人の有利さのために，あるいは彼自身が情熱的性格の人であったために，そして捕虜に対して執念深かったがために，あるいは幾人かの人が指摘しているように，大災厄が大栄光のもとで形成されていると考えていたために，[これらの都市を] 滅ぼしてしまった。ともかく，ローマ人たちはこの日をもって彼をアフリカヌスでヌマンティヌスというふうにこの二つの場所に因んで呼び慣わ

した。427.その近隣諸市の間で，ヌマンティアの領土は分割され，他の諸市である種の商取引をしたり，彼が疑惑を抱いた人々を咎めたり，消し去ったりした後に，ローマへと出帆した。

というふうに，ヌマンティア戦争の顚末を述べ，所々で教訓的になりながら，この結論の部分（99.428-102.444）を次のように結んでいる。

[99]428.ローマ人は，彼らのしきたりによって，イベリア半島の新たに獲得した属州へ，その地を平和裡に治世すべく，十名の元老院議員を派遣した。その［領土の］うちに，スキピオ，あるいは彼以前にブルトゥスが，投降を受け入れたり，あるいは兵力で圧倒しながら獲得していったものがある。429.のちに，別の反乱蜂起がイベリア半島で生じたときに，カルプルニウス・ピソーが指揮官に選出されていたこともある。430.セルウィウス・ガルバが彼の後を継いだ。そしてそれはキンブリ人がイタリアに侵入していたときで，シケーリアでは第二次奴隷蜂起が生じていたときであり，ローマはイベリア半島に派兵するほどに憂慮していなかったが，その地においてローマ人として最善の方法で戦いを終結させるべく使節団を派遣していた。431.キンブリ人が全く転進すると，ティトゥス・ディディウスがイベリア半島に派遣され，そこで彼はアレウァキ人二万人を殺害していた。そしてローマ人に対して常に不服従の立場を貫いていた大きな町テルメースへ移動し，［その町の住民を］その堅固な位置から平原へと追いやり，居住民たちに防禦のない生活空間を［形成するように］命令していた。432.さらに，彼はコレンドゥムの町を包囲したり，九ケ月後にはその町を却掠し，婦女子を含むコレンドゥムの居住民全員を売り払った。

[100]433.コレンドゥムの近くには，ルシタニア人との戦いの際にマールクス・マリウスと同盟関係にあったケルティベリア人の混合部族が住んでいた別の町があり，彼はその町に元老院からの許認が出るまで五年間にわたり彼らを居住させていた。彼らはその貧しさのために強奪を生業にしていた。434.ディディウスはまだその地に逗留していた十人の使節団と協力して彼らを滅ぼそう

とした。それで彼は要人たちに，彼らが貧しいので，コレンドゥムの土地を彼らに分与したい旨を告げた。435.この申し出に彼らがとても歓喜しているのを見て取り，彼はその要人たちに，人々にそのことを伝えて，妻子をつれ，その地から区分地に移動するように告げた。彼らがそのように行動すると，彼は兵士たちに野営地を空にするように，そして彼が罠にかけたがっていた人々をその中に導き入れるように命じた。そしてそこで，彼は名簿作成のために，一方の登記所に男性を，他方に妻子を，彼らにどれくらいの土地を準備すべきなのかを知るためと称して集めた。436.彼らが塹壕や柵の内側に入ると，ディディウスは彼らを軍団で取り囲み，全員を殺害した。この出来事でもって，彼は現実に凱旋の栄誉に浴された。そののちケルティベリア人は再び蜂起し，フラックスが彼らに対して派遣され，二万人が殺害されるに至った。437.ベルゲーダの町の人々は蜂起［の加担に］に冀われており，元老院［使節団］が躊躇しているときに，その宿舎に火が放たれ，議員たちを焼き殺してしまった。そこにフラックスがやってきて，この罪の責任者たちを死刑に処した。

［101］438.このことは，そのときまでローマ人と一国家としてのイベリア半島地方との関連で最も価値ある記述を認めることのできる出来事であった。そしてのちに，ローマでスラとキンナとの間に軋轢が生じたとき，そして国家そのものが内乱によって軍宿営地まで二分されてしまったとき，キンナの一派に属していたクィントゥス・セルトーリウスは，イベリア半島における指揮官に選出されていたのである。439.しかし，その地方をローマ人に対して煽動していた。彼は大軍を維持しており，［その任地で］ローマ元老院の作法で自らの友人たちによって議会を創設した。そしてローマに向かって全幅の信頼と緻密な勇気を鼓舞しながら，進軍を開始した。というのも，彼は他の場所で挑戦し，そこですでに名声を勝ち取っていたからである。440.その後元老院は［イベリア半島で］一大危機に直面して，最も名声を博していた将軍を差し向けた。まず最初に，カエキリウス・メテルスを大軍団と共に，次いで別の軍団と共にグナエウス・ポンペーユスを，ともかく可能な限り，この戦いをイタリアから［直接指揮をとって］駆逐すべく，差し向けた。つまり，その内乱にひどく心を痛

めていたことを物語っていた。441.しかし，セルトーリウスは自らの一派の一員でもあったペルペルナに殺害された。ペルペルナは自らセルトーリウスに取って代わって一派の将軍に収まった。ポンペーユスはこのペルペルナを戦いで殺害した。この戦いはローマ人に非常な危機感を植え付けたのだが，これで終焉を迎えた。しかし，私はスラの内乱に対する私自身への説明のために，これをより特別に物語っていくであろう。

[102]442.スラの死後，ガーユス・カエサルがイベリア半島統治のために，もし必要ならば戦いをも辞さないという勢力を率いて派遣されてきた。ローマ人との同盟に疑いをもったり，屈服することのなかったイベリア半島の諸部族を，彼はその軍事力で服従させてしまった。443.そのある部族は後に反乱を引き起こしたが，彼の養子でアウグストゥスと呼称されたオクタウィーウス・カエサルに屈服した。444.そのとき以来，ローマ人はイベリア半島，それまではヒスパニアと呼ばれていたのだが，それを三地域に分割し，それぞれを統治すべく統治者を派遣し，うち二つの地域は元老院で毎年選出され，三番目の地域は皇帝直轄統治地域になった。

このように叙述されているのが，ヌマンティア戦争を中心にしたアッピアノスの記述である。この試訳をもとにして，以下少し考察を加えてみたい。

### 3．アッピアノス史料解釈の手法，デ・サンクティス，ジーモンを中心[34]に

まず，各章節にしたがって論を進めていきたい。

[84]363. Simon は，これを典拠にして，“Die Stimmung im Volk war derart, daβ er als der einzige bewtrachtet wrode, der den Krieg gegen Numantia erfolgreich würde beenden können”（p. 172）と述べている。つまり，士気の昂揚が一方にあったことを示唆している。それほど，ローマにとっては，イベリア半島での出来事が身近になってきたのかもしれない。Cf. Plut. Apophth. Scip. Min. 15; Flor. 1. 34. 2; Cassiod. Chron. また，前134年の選出については，Cic. Lael. 11には，“iterum sibi suo tempore, reipublicae paene sero.”と。

364. この叙述について，Simon は，“Auf sein Betreiben legalisierten die Volkstribunen nachträglich die Wahl, indem sie ein Gesetz beantragten, welches das Verbot einer Iterierung des Konsulats aufhob, und alsbald dann ein zweites, das dieses Verbot wieder erneuerte.（pp.172-173）と。ここは比較的重要な箇所に思える。つまり，アッピアノスは，どうやら年齢制限に関する立法を，前147年の選出の際に生じた出来事を通じて，自家撞着的に記述している可能性が濃い。その選出が阻まれていたことについては，同じ App. Lib. 112. 532にみられるし，またそれを報告しているものとして，Liv. Per. 56: sicut priori consulatu legibus solutus est. が。Cf. Liv. Per. 50.

365. ここに関しては，De Sanctis, Simon 共に “φίλων ἴλη” の表現についての解釈に終始している。De Sanctis は，“Qui non è dubbio che la espressione greca “φίλων ἴλη” traduce la latina “cohors amicorum” e che la fonte di Appiano, ……, attribuisce a Scipione Emiliano la origine della “cohors amicorum” la quale spesso accompagnava i governatori del sec. I a. C.”（p. 260 n. 259）と。つまり，試訳の中では『善隣友好軍団』と訳出しておいた。また，Fest. 249 L. には，“Paretoria cohors est dicta, quod a praetore non discedebat. Scipio enim Africanus primus fortissimum quemque delegit, qui ab eo in bello non discederent et cetero munere militiae vacarent et sesquiplex stipendium acciperent.” とあり，こうしたものが一つの考えの基調にあることを示唆している。因みに，Simon はこれを “Schar der Freunde” と訳出している。

366.『甥のブテオ』に関して，De Sanctis は，“……gli dà non sappiamo con quale fondamento il cognome di Buteone.（p. 262 n. 267）と述べている。Cf. App. Lib. 112. 529-533; Val, Max. 8. 15. 4; Cie. Lael. 3. 11： 20. 73; Vell. 1. 12; Liv. Per. 50; Auct. de vir. ill. 58; Mommsen, Th., Römische Staatsrechet, vol. 1. Graz, 1969 [Repr.], p. 580 n. 2. その他，さまざまな実例については，Cic. Phit. 11. 17; Diod. 32. 9 a; Plut. Praecept. ger. reip. 10. 8（805 A）; Dio Cass. frg. 71; Rhet. ad Herenn. 3. 2; Zon. 9. 29; Cic. ad Att. 1. 1. 1. などを参照せよ。

さらに，De Sanctis は続けて，“……Non è facile spiegare come ciò avvenisse mentre le elezioni dei questori erano di regola posteriori a quelle dei consoli……”と，Mommen (op. cit.) を引用して述べている。ともかく，クァェストルであったと考えるのが妥当なところではなかろうか。そしておそらくは，クィントゥス・ファビウス・マクシムス・アッロブロギクスではなかろうか。Cf. Broughton, T. R. S., MRR i, p. 491; Cichorius, C., Untersuchungen zu Lucilius, Berlin, 1908, pp. 317 f..

〔つづく〕

(1990.3.12成稿)

註

1）よく使用される史料については，拙稿，『初期ケルティベリア戦争におけるローマの内政とスキピオ＝アエミリアヌス』　関学西洋史論集　第6号，1976年12月，1-13頁;拙稿，『ウィリアトゥスの反乱とローマのスペイン政策』　関学西洋史論集　第7号，1977年12月，1-14頁。また，概略に関しては，本村凌二，『イベリア半島の戦火』(吉村忠典編，『世界の戦争　第二巻，ローマ人の戦争』　講談社，1985年，92-128頁。そのほか，アッピアノスに関する諸論考は，L'année philologique の各年の“Appianus”の項を参照せよ。

2）アッピアノスの生涯を探る上で唯一の史料となりうるのが，このフロントーの“ad Anton. Pium”であり，彼のエジプト史に関する興味については，Gabba, E., Appiano e la Storia delle Guerre Civili, Firenze, p. 110 n. 5 を見よ。

3）App. BC 2. 380; fr. 19. そしてこの出来事に関しては，その詳細な文献が Gabba, E., ed., Appiani, bellorum civilium, liber primus, Firenze, 1967 (2nd ed·), p. vii-viii, n. 4 に記載されている。

4）App. BC 2. 362. これについて，Gabba, op. cit., p. viii は，“Non obbliga a intendere che Appiano fosse in Egitto quando vi fu in quell'occasione Adriano, cioè nel 130 d. C.”と，その逆をも婉曲的に示唆しているのだが。Cf. ibid., n. 1.

5）Front. op. cit., IX, pp. 170-1 Naber. しかしこの点においては，Stein, A., Der röm. Ritteratand, München, 1927, p. 134 n. 2; Reuss, F., “Arrian und Appian”, RhM 54, 1899, pp. 446-465, esp. 463; Pflaum, H. G., Les procurateurs équestres

sous le Haut-Empire romain, Paris, 1950, pp. 204-205. などは App. praef. 62 の中にみられる "καὶ δίκαις ἐν Ῥώμῃ συναγορεύσας ἐπὶ τῶν βασιλέων" を解釈しつつ, advocatus fisci の可能性をも模索しているようである。

6) この時期のフロントーの名声に関しては, Dio, 69. 18. 3. を見よ。

7) Front., op. cit., IX, pp. 170-1 Naber. ともかくこうした書簡のやりとりについては, 明確な年代が出て来ないわけであるが, Haines, C. R. の手になるロエブ古典叢書では, それを175年頃から161年あたりに位置づけており, id., "On the Chronology of the Fronto Correspondence" CQ 8, 1914, pp. 112-120, esp. 119で, 明確に157年から161年の間と位置づけている説に従いたい。

8) いわゆる「アッピアノス・プロソポグラフィー」に関しては, 前掲文献のほかに, Schwartz, Ed., "Appianus", RE 2, col. 216-237; Christ-Schmid-Stählin, Geschichte der griech. Literatur, vol. 2, 1924, pp. 751-753; Rosenberg, A., Einleitung und Quellenkunde zur römischen Geschichte, Berlin, 1921, pp. 203-210. などがあげられ, 近年においては, Gabba, E. や Sordi, M. などのイタリアの研究者を中心としてその史料研究が割合盛んに行われてきている。

9) Mendelssohn, L., Appiani Historia Romana, vol. 1, Lipsiae (Teubner), 1878, pp. v—xxvi; White, H., The Roman History of Appian, vol. 1 New York, 1899, pp. viii-xxvii [in Loeb Classical Library, 1912, pp. vii-xii]; Schwartz,Ed., RE s. v. Appianus, coll, 216-217; Reuss, RhM 54, pp. 461-463; Virereck, P. & Roos, A. G., Appiani Historia Romana, vol. 1, Lipsiae (Teubner), 1939, pp. iii-xxviii [Gabba,ed., 1961, pp. v-xxxi]; Rosenberg, op. cit., p. 204; Gabba, op. cit., pp. x-xxi.

10) App. Praef. 45-50; cf. Diod. 5. 1. 4.

11) App. Praef. 46.

12) App. Praef. 46-47; Dion. Hal., epis. ad Pomp. 13-14.

13) Cf. Gabba, op. cit., p. xiv.

14) App. Praef. 49に, "κατὰ ἔθνος ἕκαστον" とあることでも明瞭であろう。Cf. App. Praef. 48.

15) Gabba, E., Appiano e la Storia delle Guerre Civili, Firenze, 1956, pp. 110 ff.; cf. Gabba, E., ed., Appiani, bellorum civilium, liber primus, Firenze, 1967, pp. xiv—xv.

16) App. Praef. 59; ἐς τοὺς στρατηγοὺς τῶν στάσεων διῄρηται.

17) Gabba, Appiano e ....., pp. 93 ff..

18) App. Praef. 50. さらに, 同じようなディオン・カッシウスの場合について,

Schwartz, RE s. v. Cassius, n. 40, coll. 1687-1690を参照せよ。また Gabba は, Appiani, ……, liber primus, p. xv で, 以下のように婉曲的に批評している。すなわち, "Per quanto riguarda gli 'Εμφύλια, sembrerebbe che Appiano abbia fatto talora ricorso a manualidi cronologia, senza, tuttavia, che sia sempre perspicuo il significato della scelta del momento in cui la notazione cronologica (indicazione dell'Olimpiade o diavvenimenti di rilievo) è introdotta" と。

19) App. Praef. 1-18.

20) App. Praef. 29-42.

21) App. Praef. 43-44. 特に44.

22) Gabba, op. cit., p. xvi.

23) App. Praef. 43-44. で, "...ἔς τε τὴν περίκτησιν αὐτῶν ἀρετῇ καὶ ταλαιπωρίᾳ πάντας ὑπερῆραν,...." との叙述がある。

24) Gabba, op. cit., p. xvi.

25) App. Praef. 44.

26) App. Praef. 24: ...καὶ πάντα ἐν εἰρήνῃ μακρᾷ καὶ εὐτῶν προῆλθεν εἰς εὐδαιμονίαν ἀσφαλῆ.

27) App. Praef. 26-27.

28) App. Mithr. 111; Gabba, Appiani, ……, liber primus, p. 544 addenda et corrigenda.

29) 例えば, App. Iber. 99-102. など。

30) Gabba, op. cit., p. xvii.

31) Meyer, Ed., Kleine Schriften, I, P. 379 n. 1.

32) Rosenberg, op. cit., p. 205.

33) この原典は, Viereck, P. & Roos, A. G., Gabba, E., ed., Appiani Historia Romana, vol. 1, Lipsiae, 1962, pp. 126-140; White, H., ed., Appian's Roman History, vol. 1, 1964, pp. 270-301である。

34) De Sanctis, G., Storia dei Romani, vol. 4-3, Firenze, 1964, pp. 258-279; Simon, H., Roms Kriege in Spanien, 154-133 v. Chr., Frankfurt a. M., 1962, pp. 171-191. を論考の中心に据えていくことにする。その他, Schulten, A., Geschichte von Numantia, München, 1933 [repr. New York, 1975]も考古学的地理的視点から考えて大事であろう。Cf. Hildebrandt, H.J., "Die Römerlager von Numantia. Datierung anhand der münzfunde", MDAI (M) 20, 1979, pp. 238–271.